

## はじめに

「クルーズ」という言葉を見たり聞いたりする」とが多くなった。マスメディアも、クルーズをたびたびとり上げるようになつたし、クルーズの広告も多くなつた。クルーズとはいったい何だろう。

ここでいうクルーズとは、レジャーが目的の船旅のことである。つまり、船に乗つて観光地を周遊するわけだ。寄港地では、ホテルに泊まらず、船がホテルになる。だから、いつたん乗り込めば客室（キャビン）は我が家であり、寄港地のほうが次から次へとやつてくる。「目覚めれば、次の観光地」なのである。こんなに効率的でらくな旅は、ほかにはない。

そして、このような船を「クルーズ船」といつていい。交通機関であつた「定期客船」とは、まったくちがうタイプの船なのである。「一～二等の等級差もない。むかしの定期客船や、現代のフェリー、航空機のような等級ではなく、全船が一等のワンクラスである。

世界ではいま、年間二〇〇〇万人を超える人たちがクルーズを楽しんでいる。これはたいへんな数字である。かつて世界一忙しい海上ルートだつた北大西洋航路でさえ、旅客数が一〇〇〇万人を超える年はあまりなかつた。交通往来と移民でにぎわつたドル箱航路で、すらその程度だ。だから現代は、史上空前の船旅時代といつていい。

そして、特筆されるのは、二一〇〇万人のほとんどが一般庶民であるということだ。万人が楽しめるといふこと。これが現代クルーズの大きな特色である。日本では船旅というと、「カネとヒマのある人の特別なレジャー」と思われてきたが、そうではない。

筆者はこれまで、妻と一緒に、クルーズがさかんな欧洲や北美へとび、何隻ものクルーズ船に乗つてきた。財布と相談しながらの船旅である。欧米のクルーズ船には、じつにさまざまな人たちが乗つている。老若男女。家族づれもよく見かける。もちろん、子どももわたくさん乗つている。髪、目、肌の色もいろいろで、インターナショナルだ。ディリー（船内新聞や船内放送が、英、仏、独、伊、スペインの五カ国語という船も多い。

\*

クルーズ船が生まれたのは、一九世紀である。着想したのは、サンシャインにめぐまれない北欧の人たち

だつた。最初は定期客船をクルーズ船に転用し、夏季はノルウェーのフィヨルドや地中海、冬季はカナリア諸島やカリブ海を航海した。

一〇世紀に入ると、王室ヨットからヒントをえた専用のクルーズ船が造られた。世界一周クルーズもはじまつた。乗ることができたのは、ひとにぎりの金持ちだけであつた。

万人が乗れる米国型クルーズが生まれたのは、第一次大戦後の一九六〇年代。誕生地は北米である。クルーズ先は、カリブ海、アラスカ、メキシコ海域など。着想したのは、米国と北欧の企業家たちだつた。そして、米国経済が絶好調だつた一九九〇年代に大ブレーカし、欧州、豪州、南米、南アフリカ、東アジアへと広まつていつた。

大ブレークした理由は二つある。

第一は、米国型クルーズが持つ豪華コンセプトにある。つまり、豪勢で快適な船旅を楽しめるということだ。米国型クルーズは、定期客船時代の豪華な一等サービスが原点になつてゐる。歴史的にみると、豪華な一等サービスは、一九世紀後半の北大西洋航路で生まれた。そして、一〇世紀前半に完成し、現代の米国型クルーズに引き継がれてゐる。

もう一つの理由は、乗船料金が安いということだ。海外では、円に換算して一泊あたり一人一万数千円ほどで一流のクルーズ船に乗れる。この金額には、船の運賃と宿泊費はむろんのこと、食事代、デッキチエアやプールなどの利用料、ショーなどのエンターテインメントの代金もふくまれてゐる。料金が安くて豪華なのだから、大ブレークするには当然。クルーズが一般庶民のレジャーになつたゆえんである。

「安く豪華」。どうして、「こんな」とが可能になつたのであらうか。

その秘密は大型クルーズ船の登場にある。世界ではいま、七万トン（＊）を超える大型クルーズ船の船旅が主流になつてゐる。

巨船クイーン・メリー2（Queen Mary 2）（一四万八五二八トン、略称QM2）がたびたび来日し、一三二万トンの巨大船もカリブ海に就航している。こうした大型クルーズ船のほとんどは、一〇〇〇人以上の船客定員があり、一〇〇〇人近くの船員が乗組んでいる。そして、莫大な運賃収入が運航をささえている。

船を大型化することで経営の安定性をはかるという

ボリシーも、一九世紀後半の北大西洋航路で生まれ、二〇世紀前半に定着した。有名なオリンピック Olympic (四万五三一四トン) と同型船タイタニック Titanic (四万六三一九トン) は、こうしたボリシーで造られた最初の大形客船である。

\*

クルーズは熟年者向きのレジャーである。洋上では時間がゆったりと流れ、寝ているうちに次の観光地へつれていってくれる。スケジュールに追われる陸上バスツアーとは正反対。船内は安全だし、医療施設も完備している。

こうしたことから、日本でも最近、シルバー世代を中心にクルーズを楽しむ人がふえてきた。日本船のほか、米国系の大型クルーズ船が日本発着のクルーズをおこない、乗船する日本人もふえてきた。クルーズは日本人の日常的なレジャーとして定着しつつある。

日本では、年間約二〇〇〇万人の人たちが海外へ出かけている。そして、団塊世代のリタイアを背景に、相当数の人たちがクルーズを計画し体験するという展開になってきた。クルーズは、今後、日本でさかんになるにちがいない。

クルーズの歴史について書いた本書が、こうした隆盛時代への「道しるべ」になれば、筆者としてこれにまさる喜びはない。

\*この本では、船の大きさを表すのに、容積をもとにする「総トン」を用いた。客船のばあいは、これが一般的である。測りかたは「一九六九年の船舶トン数に関する国際条約」で国際的に統一されたが、それ以前は、船の所定容積を一〇〇立方フィート（約一・八三立方メートル）＝一トンで表示した。

## 目 次

はじめに

第一話 クルーズの誕生と発展

クルーズを考えた企業家  
サッカレーの地中海周遊  
マーク・トウェインの地中海遊覧  
史上初の本格的なクルーズ  
まるでユダヤ教会のようだった  
先覚者アルベルト・バリン  
バリンのクルーズヨット

第二話 豪華客船の登場

船内にはじめて電灯がついた  
食料用の冷凍装置が出現した  
ドイツ皇帝の北大西洋航路客船  
無線電信が装備された  
ハックを打ちのめしたコレラ事件  
豪華さと乗り心地で勝負する  
史上最初の豪華客船アメリカ  
リツツ・カールトン・レストラン  
エスコフィエが料理部門を指揮  
ベーグド・アラスカの元祖

第三話 タイタニックの時代

北大西洋航路のブルーリボン  
ルシタニアとモレタニア  
三隻体制のウイークリーサービス  
ホワイト・スター・ラインの登場  
オリエンピックとタイタニック  
タイタニックの「食」エリア  
ロンドンの高級レストランが経営  
ベランダつきスイートルームが出現  
パーラー・スイートの富豪たち  
船と運命をともにしたホテル王  
男性にも脱出のチャンスがあつた  
救助された日本人船客・細野正文

一  
頁

救命ボートの数が生死をわけた  
現代に生きる大悲劇の教訓

第四話 バリンの三巨船

五万トンを超えた史上初の客船  
陸上建築のコンセプトを客船に導入  
ポンペイ風スイミングプール  
ドイツ皇帝がインペラトールに乗船  
「船らしくない船」で快適な船旅  
大戦で挫折した三巨船構想

第五話 世界一周クルーズ

国家主義による超豪華客船  
ヴィクトリア・ルイーゼの新工夫  
世界一周クルーズのはじまり  
ラコニアの世界一周クルーズ  
エンブレス・オブ・ブリテンの来日  
日光で一泊するオプショナルツアーアー  
豪勢だった「フランス」の世界一周  
クイーン・エリザベス2の世界一周

第六話 クイーン・エリザベス2 (QE2)

日本で最も知名度が高い外国船  
海路と空路の利用客数が逆転  
元ジユエリーデザイナーが基本設計  
パナマ運河を通過できる巨大客船  
建造中も設計変更がおこなわれた  
デビューの前にエリザベス女王が訪船  
二〇年の延命工事をドイツで受ける

第七話 米国型クルーズの誕生

アリソンとクロスターの出会い  
ノルウェージャン・カリビアン・ライン  
新コンセプトのクルーズ船が登場  
サンシャインいっぱいのリドデソキ  
全船ワンクラスが基本コンセプト  
フライ&クルーズのはじまり  
ロイヤル・カリビアン・クルーズ・ライン

二  
七

バイキング・クラウン・ラウンジ

一ドルから出発したカーニバル王国

ファンシップを掲げて大ブレーク

## 第八話 老舗の復活

ダイヤモンド・プリンセス誕生  
プリンセス・クルーズ社の創業

北米ウェストコーストを拠点に事業展開  
TVドラマが北米の船旅文化を育てた

HALも米国型クルーズへの変身に成功

東南アジアの島嶼民族をクルーに採用

「脱・オランダ」「脱・北大西洋航路」

アラスカ・クルーズに社運を賭ける

第十一話 米国型クルーズの課題

寡占化が進むクルーズ産業

客船界の頂点に立つミツキー・アリソン

大型クルーズ船と地球環境問題

アラスカ海域における排ガス問題

地球環境とどう折り合っていくか

「九・一二」がフライ&クルーズを直撃  
感染症リスクにそなえる大型クルーズ船

続発するノロウイルス集団感染

船長が握手をしなくなつた

それでもふえる世界のクルーズ人口

おわりに

## 第九話 クルーズ船の巨大化

米国型クルーズを育んだカリブ海  
巨大化を先導した「ノルウェー」

自走式の大型デンダーボートを搭載

「海の帝王」がカリブ海に登場

五デッキ吹き抜けのアトリウムが出現

「ティッシュ箱トリオ」が登場

七万トンクラスを量産したCCL

ボイジャー・オブ・ザ・シーズ

巨船クイーン・メリーラ (QM2)

オアシス・オブ・ザ・シーズ

パナマ運河の拡張

八六

九四

クルーズ史年表  
写真・イラストの出所  
船名索引  
人名索引

## 第一〇話 なぜ巨大化したのか

クルーズ船はなぜ巨大化したのか  
「浮かぶリゾートホテル」になつた

AOCコンセプトの客船とは  
世界に広がるクルーズ船巨大化の波

七六

## 第十一話 日本のクルーズ

日本型チャーターカルーズの誕生  
「クルーズ元年」  
飛鳥ブランドの定着  
画一性か多様性か

一四